

研究

佐伯と國木田独歩

(其の二) 尺間神社

會員 山本 保

佐伯市上岡駅のプラットホームに、次のような案内板が立っています。

名所案内 (實際氏古横書)

尺間岳 (海拔六〇八呎)

山頂に尺間神社あり、眺望絶佳

北八呎、徒歩二時間

十三重の塔

佐伯氏の建立した供養塔

北一五〇m、徒歩五分

大内梅林

見頃 二月上旬

南東 一、五呎 徒歩二〇分

佐伯史談先月号で、賛助会員高橋智氏の「尺間神社由來記」と楽しく読ませていた。たきました。「毎年正月三ヶ日、いづれかの日に、早朝尺間神社に参拜のため登山することにしてゐる。」という一文が強く心を打ちました。独歩は今から七十七年前へ佐伯鶴谷学館着法九日、明治二十六年十月八日と十一月十八日の二回、尺間山へ登りました。

一回目は赤木村(林生所赤木)の近道から、二回目は

明治村(林生所植松)の愛宕神社より裏山から登つていま

登山の様子と、友人の山村三治氏(東京専門学校時代)の同級生(宛の手紙によつて紹介いたします)。

一回目の登山(十月十八日)

佐伯に來りて僅かに十日、而して既に三個の山へ城山、金比羅山、尺間山に登り候。其の最後は即ち一昨日(日曜日)、尺間山と稱する佐伯を去る三里の高峰に攀ぢ、終日、峰より峰、谷より谷に涉りて暮し候。

絶頂に近き辺は、巖石突として空を切り、社其のてつべんにありて、鋸をたよりて登り得るほどに絶崖に候。

二回目の登山(十一月十八日)

此度は其山頂に一泊の覚悟にて、蕭々用意の三度分(むすむ二人前)三十三個(と)担い、毛氈二枚用意仕り候。震分に照る秋の光とすこし斜めに浸け、愉々快々言ふに言はれぬ心越と水素を致し、身体を一種の精神的輕氣球と仕り、落く如く飛ぶ如く歩行致候。

此の頃は此の以前(十月十八日)登山の帰路、先穂夫と一少半に出遭ひたる処にて、其穂夫のいかにも衰へたる、こと導く少半のいかにも無窮究らしきことは、小生の頭底固く印して矢せず、其の後尺間山を思へば必ず聯感致す場所候。此時己に夕陽西に傾き、連山の頂火花を点じ、西方阿蘇(一五九二m)の煙かまた雲か、惚々たる茶煙の色、人をしてそそろに一種のメラ(カ)ゴリと覺

えしめ候。

さて西に夕陽を眺め、頂上スズメ己に月の光を澄みたる空に戴き、いよいよ登りて遂に尺間の絶頂に達し申候。此時己に全く夜、月光霜シラカミ如く、空座の寂寞天地をこめぬ。

此一軒家に到着致したる時の心地と申しては、とても都(東京)の生活シヨウゴの及に染み給ふ(冒す)大兄オウケイ如き人々の想像ソウゾウを貸しますか」と障子頭けて頭差し入れて問ひしは小生なり。

女を見れば室内朦朧として片隅に一個の炉カマドあり。自在かぎに掛けあるものは大鍋、其傍に座する者は一個年増の女、一個十三、四歳と見ゆる少女、其他に此の大寂寞の山頂の物すこぎ住家なるにも拘らず、唯一つ男の影もなし。

若し此二人が荒くれ男の毛たらくと想像すれば、此のおぼらやこそ疑ひもなく山賊の住家とこそ申すべけれ。幸ひにして大反対の婦女子年若し二人なりしは、また一種異様イサマの感も有之候。

炉を擁して対たいふに少女と年増と坐し、此の方に收こニと坐し、炉は焰々エンエンと燃え上りて四人の面未く照す。若し室内を見廻せばただこれ一間一軒の茅屋に過ぎず。天井なくただ大木の丸太を横たふるを見る。其上にはしごなど板いたがあげあり。室内ふすまびりて暗燻アツクたる事は物すこぎばかりなり。

西の一角に奇怪の神棚ありて燈とほけ居たり。これ家に祭れる尺間の女神とこそ思はれ候。東の一面に食器など並べ置く棚あり。炉の一方に二枚屏風の申立ての土の立つを見たり。それはいなく煤すすり居たり。凡てこれ木賃宿の体。

年令三十四、五、一目眼を動し、つゞばき着し、怪しき語りにて語る。忽ち笑ひ、忽ち真面目となる。其のキヤラ(世)グター容易に知るべからず。少女は白井の昔の由、願ねがはどきの左め一週間籠かごり居ると云事、哀れとや申すべき。

吾等此の怪しき屋根の下、此の面白き炉火カマドに対し、此の二人の婦女と語り、用意のむすびを食して後、屋外に出れば、月光昼ヒル如し。今こそと藁の絶頂に上りて思ふままに此の明月に向ひ候。

身はただ天地落々の際に漂ふが如く、思ひ悠々として窮まる死を知らず。左に見る珠霧たまご霜の知り下界をこめ、山も野も谷も其底に眠り、男も女も親も子も家族も社会も時代も歴史も恋も恨も怨も、何もかも此の底に包まる。

仰あぎ望のぞみは、無限無辺無窮の大空悠々として松がるを見る。星も、月も、太陽も木星金星銀河、ありとあらゆる大塊此の間まに又つ。

此夜は茅屋に眠り、明くれば十九日(十一月)日曜日、此の日は終日山より山へと跋涉仕り、終に岩嶽(赤岳、六三九)と称する高山に登り、薄暮家に帰り候時は、月ノ光断く宵の煙の香に沁しみみそめし頃にて候。

「敢かざる不記」にも、次のように記されてあります。

尺間山は佐伯を去る西北三里に在る高山なり。絶頂に祠あり。尺間神社と称す。

頂はこれ石巖々たる岩石なり。元として喬立し、四方の群山を脚下に瞰下すべし。東方大洋を望み、三方(三)連山波濤なみ如く、遠く肥州(熊本県)、日州

(宮崎県)に連なるを視る。

独歩兄弟と尺間山で出遇った(鳥谷隆義)武石素吉氏は、次のように思ひ出を語つたのです。

尺間の「のぞき」(後壁)の上で月がよいので、若い時でしたから、詩客なんか、大声でやつていた。その時に收二氏と國水田先生が来られて出遇つたのですか、それから(上月十九日)壺朝下りて先生にまでおれ、續(田舎)きは岳に登つたのでした。

昭和四十五年一月一日發行「佐伯ポケットニュース」——高岡格雅氏編集——の「背面赤面欄」に掲載されていただきます。

正月三日、佐伯史談会が初歩を随行して、尺間神社に詣でた。

床木の鳥居口から登り、帰りは尺間口へ(團圓)の線、尺間バス停留所へ下りながら、私にとって三十一年ぶりの参詣として、お山の変わりかたに一驚した。

登山道が改修されて登り良くなったのは結構だが、山上へありさま、神社のたまたま、すべて現代調になつて、ありがた味がうすくなった。

しかし、尺間講の信者や開運祈願の人々が、山上へばいにひしめき合っているのを見ると、信仰と観光が結びついたためとはいへ、現代人の心の隙間が露呈しているようで、何かものたりないものを感じた。

おつるが滝へ床木登山口より山頂に至る中腹にあり、その昔、尺間の行者たちが修業した行場だが、今は

水が涸れて滝へ水は遠い、滝壺に立つ不動尊像は籠堂に未だ祈願の行人を待っているが、(不動尊像)

さて、かつて鉄鎖をよじて登った岩壁は、(鉄鎖)としてそびえているが、道は岩壁を廻つて傾斜の緩い岩段を四百の石段で連絡し、山頂にいたっている。

山頂には、電灯も点き、鉄筋コンクリートへ茶屋土産品店も出来た。神社境内も改装されて、社務所はふれ、お茶筒、お神籤、お神酒の販売にいきなり。

信者のご祈禱を知らせるマイク放送、おずかに太鼓の音だけが昔を思おせてくれる。岩山の岩壁の厚りや、のぞきとよばれた修験行場はなくなつたが、表参道の急峻を上下する百段へ石段が残つていく。昔の尺間の姿を伝えている。浴になつた霊峰尺間、これだよいかといいたい。

① 床木登山道中腹へおつるが滝近くの籠堂の境内に、次のような石碑が三つ立っています。これは不動明王へ不動尊像と関連しています。

の音連 参詣式歩

醍醐分教会所地 岩崎興吉

の街鶴ヶ滝開祖世話人記念碑

② 奉獻芳名 (氏名省略)

御嶋滝醍醐分教会建立

③ 床木側四百の石段の鳥居へ尺間神社の額がかかけられている。横に、左のような石碑があります。正副の碑文は次の通り。

祠 礎 記 念 碑

此ノ大神ノ御徳ヲ慕奉ル人等ノ多クル中ニ母、先
幼婦女等ハ攀登ル道ノ峻キニ憐レテ、御社（おんやしろ）邊（そば）ニ
事ノ難カリシヲ河野千代藏（せんざい）甚ク憂ヒテ、岩根木（いわねぎ）根
別ケ、夏ノ熱サ冬ノ寒サニ母儀（おんぎ）甚シテ、彼方ノ川石
此方（こなた）迺（なほ）岩採来リテ、数多ノ石階（いしかた）作（つく）成（な）勢（せ）シ方（かた）延元（えんげん）年（ねん）
（一八六〇年）ナリキ。

然ルヲ年月ノ未経行間ニ此延彼延毀レ損レテ往來
危ク成ニタリシヲ、此度河合理吉、高司流五郎等奉
上人（おんじん）迺（なほ）便徳宜シク改築セント、水鳥ノ同心ニ思立、
大分県ニ請願テ国内ノ諸人ニ説キ、黄金白銀ヲ集ヘ
ニ集ヘ、去シ明治四十一年十一月ニ其事ヲ創メテ、
岩研均（いわけん）シ土築堅メ、衣石ヲ佐伯白持迺（なほ）遠近ニ
舟ニ車ニ積載セテ神山ノ麓ニ持運ビ、肩ニ背ニ担（かか）担（かか）
比テ御山ノ山頂ニ持登リ、石工等ハ打墨懸ノ一筋ニ
信徒等ハ憧ム心ノ緩ミ無ク、霜雪ニ戦ヒ雨風ヲ冒シ
勉勵（めんれい）ミテ、遂ニ今年明治四十二年四月斯久母（しきむ）慶シク
事（こと）成（な）竟（は）ス。

嗚呼、先達ノ人等ノ功績ハ神母（かみはは）賞（あ）伝（でん）人（ひと）モ讃メ、附
此石階ト共ニ永久ニ後世ニ伝ハラム、穴穿ムシノ警
レ、カナカキ。

（註） 諸々易くする左様に段落、句読点、よみがなき、おとしの
判断で付けました。
台石には、發起者高司流五郎、寄附者河合理吉等ノ氏
名が刻々こまれてゐます。

② 民間神社境内へ拜殿の近く（二つの石碑が）ありま
す。次の文字が刻々こまれてゐます。

千早ぶる神の閑きし道きまた
閑くは人の方なりけり

石段参道改修記念碑

着工 昭和三十九年五月十日
完工 昭和三十九年十二月二十二日

（高司高月道典氏）
道 典 書

信仰と観光とを以て、東九州屈指の霊山と謳われる尺
間神社の参道並に石段は、明治四十一年に築造されて以
来、其のままで年月を経ること五十余年、久しい間次々
に破壊や毀損の箇所が生じ、多くの参拜登山者が少な
く不便と危険と感ぜざる様になつてきました。

此の石段は、大分県内唯一の長い石段で「尺間様のお
段」と遠近凡ゆる人々に親しむと便宜と与え、一度参拜
した者の永久に思い出となる印象深い参拜道でありまし
たが、思えば、此の山頂にこの石段を築いた当時の人々
の真心と努力と奉仕と労苦は並大抵ではありませんでし
た。

其の恩恵によつて、久しい間各地の皆様が不安なく登
山し参拜することが出来得るものであります。

若し此のまま放置すれば破壊は其の度を増し、一般の
人々に不便と不安と与えること勿論、これを慕いた先
人にも相すまぬことになりまますので、今回当神社に奉賛
会を組織して、登山参拜者の安全と便宜を図り、雑沓の
場合をも考慮して、幅員を拡め、コンクリートで以て永
久的施設を期して、右の石段の大改修を計画、昭和三十
九年五月一日に着工致しました。

何分にも、場所柄として見積工費約五百万円を要する
容易ならざる事業ではありましたが、内神明ノ加護の下
皆様の篤志に依つて万人講による意義ある大改修を同年
十二月二十二日、約八ヶ月にて完工し得たのであります。
あとがき

孫生所(エ藤堂村長)は、日豊海岸国定公園に、某高
最高の霊峰尺間山を含め、全国に多くの信徒をもつ尺間
神社と共に大自然美をうりたそうと、昭和四十五年度事
業として参道(林道四州中、一七〇〇米)をつくる計画
をそうです。

もし、これが完成すれば、尺間登山も半分以上は自動
車で登ることでもでき、その上駐車場が設けられれば、マ
イカー族のよいコースとして、登山参拜者も激増するこ
とでしよう。

さうに、駐車場から頂上までの歩道をつくり、将来
は八戸高原とを佐々雄大なプランを考えており、
(以下23P下段参照)

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として水枝の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校
教諭・同校郷土誌クラブ顧問
小会委員 市野 瀬 仁

第二章 佐 伯 港

第二節 その社会外環境(つづき)

(二) 重要港湾指定の意義

昭和四十五年、佐伯港は念願の重要港湾の指定を受け
た。まことに喜ばしいことである。大分県にあっては、
昭和二十六年に大分、別府、津久見の諸港が指定されて
以来二十年ぶりで、県勢の發展の上からいとお自出なこ

とである。とりわけ佐伯港の指定は、日本経済の急速な
発展にもなつて、全国多数の候補の中から鹿児島、川
内、北海道、十勝と共に三港選定された最右翼のものとし
て、時代の感し手であるといえる。指定の第一の條件は
港の実績と、将来發展の可能性であると思うが、これを
成功させたのには、港に利害を持つ市民の声を背景に、
有力な各機関の援援が結びついた結果と思う。中でも商
工会頭、市長、村上寅代識士のお骨折りがおぼつかつて力
があつたと聞いている。

一國の政治家は天下國家を論じてもらわなくてはなら
ないが、同時に郷土の爲にも役立ってほしい。人が
苦労して一つの資格をかちとることは、その人にとつて
大事なことがあると同じように、重要港湾の資格をかち
とつたことは、佐伯市にとつて極めて重要な事だと私
思っている。

他田市長は、昭和四十二年立候補の際公約して以来、
四十三年の植物検疫所、四十四年以來の綜合庁舎建設、
いままた左入岡管理局佐伯出張所の設置運動等、港の建設
は佐伯市政の中心課題である。と共に港は大分県知事の
管理のもとに置かれていくことを知らなくてはならない。

二月二十一日、港のことを聴いたために市長を訪問した。
市長はこゝ度の重要港湾指定は、一つは県入理解であり、
いま一つは與人の土地提供であると話した。県は昭和四
十三年、全国港湾協会の大会で佐伯港を大分県の重要問
題としてとり上げたことの意義を説明した。また重要港
湾にふさわしい二万〜三万坪級の接岸バース建設の爲、
與人が心よく承諾したことの意義であつた。公害で批
難される與人が、会社所有の土地に佐伯木材団地使用に
理解を示し、いままた接岸バースに承諾したことなど、
いまからの企業は、社会共同休意識を持つたなくては成立

右者致類焼ニ付当分爲取統書面之麥 無利ニテ御意
渡 永永年々五十年賦返上被 御付候調其令可相心
得候 以上

年 二月廿三日

こはは親書おひいしよでなくて、お沢さわの控書かひである。今も昔も春先は火災のシイズン。当時の農家はあちこち散在して左の力で三軒位ですん左ものであろうか。(或は親書とあるから外に火元があり、又別に罹災の家もあつたかも知れない。)大事宜兵糧(そう呼んでいた)を焼いた百姓は、明日からの食へることに困る。そこで村役人を通じて救後方を頼い出左のが聞き届ける様で、罹災三軒に對して麥(米ではない)五斗宛貸渡お遣してある。無利子へ麥の貸借にも当時は利息をつけて扱つてい左し、親母おむし無盡のような制度も行われていた程、穀物そのものが流通経済の面で金銭にかわつて用いられていた)もよい。手賦償還五か年もまあ妥当なところ。五斗の麦はいもや粟など雑穀を加えれば、どうにか麦秋の五月(陰曆)までこぎつけられる。そのように私は考へて見た。

昔の百姓は米は食ふことば始んど出来なかつた。麦が主食の座にあり、粟や稗ひらの雑穀を以て補つていた。私は幸いにも(へやう思つても)貧農の家に生長し、稗まで食へてゐるのでいささか當時のこゝ赤木村の百姓達の食生活が察せられる。いぬ食生活ばかりではない。衣も住も貧しい限りであつたはずである。

この赤木村大庄屋文書の辭頭に、御算首米割賦高が示されてゐるが、それによると、本村(堂師除近)で高の五割六分一厘、中庄留が五割一分七厘、一番奥の道野山(攻原を合んで)四割九分二厘といつた状態。従つて前

に掲げ左へ資料(七)の相三割四歩の高九斗四合に對して、まずその五割を越す五斗近くが年貢、そして役人平之丞に、二割の小作を占めぬはならぬとすると、たゞ、宇兵衛母子の手許にいくらの麦が残つたてである。その畑すらも耕作を五年間売り渡すの止むない賣りである。其から食つて行けない。夜逃同様にして出稼出奔するものが毎年のよう、そういふことを扱つた資料が、僅か五年間には二十五通もあげられている。それが当然のこととされてゐたのが当時の農村社会の姿であつた。

*(十七ページ上段よりつづき) (この項終り)

ユースホステルも建設して、大自然を深し山県民や近隣のハイカー族へハイキングをすすめる人の期待に應えようという夢を抱いてゐるようです。

八戸やと高塚 標高七一六呎の基盤岳から、六五六呎の朝霧あさぎり岳を結ぶ石灰台地で、小倉の平尾台、山口県の秋吉台と共に全国四ヶ所にだけ見られるカルスト地形です。眺望とハイキングは、絶好の場所です。

尺間神社年間の大祭は左の通りです。
二月二十四日 春の大祭(祈年祭)
七月二十四日 夏の大祭(剛祭)
十一月二十四日 秋の大祭(新嘗祭)

参考資料 年表

- 養老元年(七二七) 御算張治古工門 尺間神社を勧請す。
- 四年(七三〇) 日本書紀で、さる。
- 天正元年(一五七三) 室町幕府滅ぶ。多知靈雲法印尺間山に靈場を開く。
- 分延元年(一八六〇) 河野千代藏、尺間神社奉還並石段と造る。
- 明治二十六年(一八九三) 岡本可雄歩尺間登山(二回)。
- 四十二年(一九〇九) 高町滝正即茶道並石段改修。
- 昭和三十九年(一九六四) 尺間神社奉賛会石段奉還大改修。(終)